

資治通鑑 第 182 卷

【隋紀六】 起昭陽作噩，盡旃蒙大淵獻，凡三年。

●隋、**突厥**突厥、続国訳漢文大成 経子史部 第 10 卷 280p

煬皇帝中大業九年（癸酉，613年）

【山東乱れる中、戦備進む】

●「遼東で兵募集、高句麗を諦めず」 春，正月，丁丑（13-12+1=2日），詔して天下の兵を徴して涿郡に集める。始めて民を募りて驍果と爲し，遼東の古城（漢晋以来遼東郡は襄平に治す、慕容氏は初めて平郭に治す）を修めて以て軍糧を貯える。

●**靈武**（帝は靈州を改める）の賊帥の**白瑜娑**は牧馬を劫掠し，北に突厥に連なり，隴右は多く其の患いを被り，之を「奴賊」と謂う。

●戊戌（34-12+1=23日），天下に赦す。

●己亥（35-12+1=24日），刑部尚書の**衛文升**等に命じて代王の**侑**（後に唐の李淵が擁立する）を輔けて西京を留守せしむ。

●二月，壬午（18+60-41+1=28日、続は壬子の誤りだとする），詔す、

「**宇文述**は兵糧の繼がざる（前卷にあり）を以て，遂に王師を陥いらせる。乃ち軍吏は支料を失い，**述**之罪に非ず，宜しく其の官爵を復すべし。」

尋いで又た開府儀同三司を加える。（10-281p）

●「高句麗再征服を議す」 帝は侍臣に謂って曰く、

「高麗は小虜なり，上國を侮慢す。今海を抜き山を移す，猶ほ克く果たすを望む，況んや此の虜を乎！」乃ち復た高麗を伐つを議す。左光祿大夫の**郭榮**は諫めて曰く、

「戎狄は禮を失う，臣下之事なり。千鈞之弩は，鼯（小鼠）鼠の為に機を發せず（杜襲は曹操を諫めてこの言あり），奈何して親しく萬乗を辱め以て小寇に敵せん乎！」

帝は聽かず。

●三月，丙子（12-11+1=2日），濟陰（帝は曹州を改めて濟陰郡とす、現・山東省荷沢市定陶区）の**孟海公**は起ちて盜を爲し，周橋に保據し，衆は數萬に至り，人の書史を稱引するを見れば，輒ち之を殺す。

●丁丑（13-11+1=3日），丁男十萬を發して大興に城きずく。戊寅（14-11+1=4日），帝は遼東に幸し，民部尚書の**樊子蓋**等に命じて越王の**侗**を輔けて東都を留守せしむ。

●「山東に賊各地に興る、張須陁の大活躍」 時に所在は盜起り，齊郡の**王薄**、**孟讓**、北海の**郭方預**、清河の**張金稱**、平原の**郝孝德**、河間の**格謙**、勃海の**孫宣雅**，各々衆を聚めて攻剽し，多き者は十餘萬，少き者は數萬人，山東は之に苦しむ。天下は承平なること日久しく，人は兵を習わず，郡縣の吏は賊と戦う毎に，風を望みて沮敗す。唯だ齊郡の丞の閭郷の**張須陁**は士衆の心を得，勇決にして善戦し，郡兵を將いて**王薄**を泰山（山東省濟南道泰安県、現・泰安市泰山区）の下に撃つ。**薄**は其の驍勝を恃み，備えを設けず。**須陁**は掩撃し，大いに之を破る。**薄**は餘兵を收めて北に河を渡り，**須陁**は臨邑（齊郡の県、山東省東臨道臨邑県、現・德州市臨邑県）に追撃し，又た之を破る。**薄**は北に**孫宣雅**、**郝孝德**等十餘萬に連なり章丘（齊郡に属す、山東省濟南道章邱県、現・済南市章丘区）を攻め，**須陁**は歩騎二萬を帥いて之を撃ち，賊衆は大敗す。賊帥の**裴長才**等の衆二萬は掩いて城下に至り，大掠す。**須陁**は未だ兵を集める暇あらず，五騎を帥いて與に戦い，賊は競いて

之に赴き、圍むこと百餘重、身に數創中たり、勇氣は彌々厲し。會々城中の兵は至り、賊は稍退卻す。須陀は衆を督して之を撃ち、長才等は敗走す。庚子（36-11+1=26日）、郭方預等は軍を合わせて北海を攻め陷とし、大掠し而して去る。須陀は官屬（民屬×）に謂って曰く、

「賊は其の強きを恃み、我救う能わざると謂う。吾は今速かに行けば、之を破るは必ずなり矣！」乃ち精兵を簡びて倍道して進撃し、大いに之を破り、數萬級を斬り、前後の賊の輜重を獲ること勝げて計える可からず。

●【張須陀と羅士信の戦場活躍を描く】歴城（齊郡の治所、山東省濟南道歷城縣、現・濟南市歷城区）の羅士信は、年十四なり、須陀に従いて賊を濰水（山東省濰東道濰縣、現・濰坊市濰城区）の上に撃つ。賊は始め陳を布くや、士信は馳せて陳の前に至り、數人を刺殺し、一人の首を斬り、空中に擲げ、槩を以て之を盛け、掲げて以て陳を略す。賊徒は愕胎し、敢えて近づく莫し。須陀は因りて兵を引いて奮撃し、賊衆は大いに潰える。士信は北げるを逐い、一人を殺す毎に、其の鼻を削ぎ之を懷にし、還り、以て賊を殺す之數を驗す。須陀は歎賞し、引いて左右に置く。戦う毎に、須陀は先登し、士信は副と為る。（10-282p）帝は遣使して慰諭し、並せて須陀、士信の戦陳之狀を畫かしめ而して之を觀る。

【遼東・高句麗に出陣】

●【楊帝は遼河を渡る】夏，四月，庚午（6+60-40+1=27日），車駕は遼を渡る。壬申（8+60-40+1=29日），宇文述を遣わして上大將軍の楊義臣と平壤に趣かしむ。

●高句麗【新城の戦い】左光祿大夫の王仁恭は扶餘道に出でる。仁恭は進軍して新城（南蘇城の西に在り）に至り、高麗兵數萬は拒み戦い、仁恭は勁騎一千を帥いて撃ちて之を破り、高麗は城を嬰して固守す。帝は諸將に命じて遼東を攻めしめ、便宜を以て事に從うを聽す（前回は一々指示は仰がせて失敗）。飛樓、橦、雲梯、地道は四面俱に進み、晝夜息まず、而して高麗は變に應じて之を拒み、二十餘日拔かず、主客（守備側も攻城側も）の死者は甚だ衆し。冲梯竿は長さ十五丈、驍果吳興（浙江省錢塘道吳興縣に吳興郡を置く）の沈光は其の端を升起、城に臨みて高麗と戦い、短兵は接し、十數人を殺し、高麗は競いて之を撃ち而して墜ちる。未だ地に及ばざるに、適々竿に垂縲（索）有るに遇い、光は接し而して復た上る。帝は望見し、之を壯として、即ち朝散大夫に拜し、恆に左右に置く。

●【李密の才覚現わる】禮部尚書の楊玄感は、驍勇にして、騎射に便い、好みて讀書し、賓客を喜び、海内の知名之士は多く之と遊ぶ。薄山公の李密（爵蒲山郡公を繼ぐ。李密の事ここより始まる、唐の勃興の始まり）と善し。

密は、弼（宇文氏の佐命の功臣）之曾孫也、^{わか}少くして才略有り、志氣は雄遠なり、財を輕んじ士を好み、左親侍（隋の制では左右翊衛府は親勳武三侍を領す。左親侍は左翊衛に属す）と為る。帝は之を見、宇文述に謂って曰く、

「向者の左仗下の黑色の小兒は、瞻視は常に異なる、宿衛せ令む勿かれ！」

述は乃ち密を諷して病と稱して自ら免ぜ使め、密は遂に人事を屏け、専ら讀書に務める。嘗て黄牛に乗り《漢書》を讀み、楊素は遇い而して之を異として、因りて召し家に至り、與に語り、大いに悦び、其の子の玄感等に謂って曰く、

「李密の識度は此くの如し、汝等は及ばざる也！」

是に由りて玄感は與に深交を為す。時に或は之を侮り、密は曰く、

「人言は當に實を指すべし、寧ぞ面諛す可けんや！若し機を兩陳之間に決し、暗鳴（怒氣を含む）咄嗟（怒る声）し、敵人をして震懾せ使めれば、密は公に如かず。天下の賢俊を驅策し、各々其の用を申べるは、公は密に如かず。豈に階級ややたか稍崇きを以て而して天下の士大夫を輕んず可けん邪！」

玄感は笑い而して之に服す。

●【楊玄感への寵遇日々隆し】素は功を恃みて驕倨し、朝宴之際、或は臣の禮を失う。帝は心に銜み而るに言わず、素も亦た之を覺る。素の薨ずるに及び、帝は近臣に謂って曰く、

「素をして死さら使めば、終に當に族夷（続は族滅）すべし。」

玄感は頗る之を知り、且つ自ら累世貴顯にして、在朝の文武は多く父之故吏を以て、朝政日々に紊れ、而して帝は猜忌多きを見、内に自ら安んぜず、乃ち諸弟と潜に亂を作さんと謀る。帝は方に征伐を事とし、玄感は自ら言う、

「世々國恩を荷ない、願わくは將領と為らん。」

帝は喜びて曰く、

「將門には必ず將有り、相門には必ず相有り、固より虚しからざる也！」

是に由りて寵遇は日々に隆し、頗る朝政に預る。

【楊玄感の反乱】

●【高句麗】【楊玄感は故意に兵糧を送らず】帝は高麗を伐ち、玄感に命じて黎陽に於いて運を督せしめ、遂に虎賁郎將の王仲伯、汲郡の（10-283p）贊治（帝は州を改めて郡と為し、郡に太守を置き、長史司馬を罷め贊務一人を置き、以て之に忒す。贊務は即ち贊治なり。隋書は唐の臣に成るので、高宗の諱を裂けて治を改めて務と為す）の趙懷義等と謀り、故（こと故意）さらに漕運を逗留し、時に進發せず、渡遼の諸軍をして食に乏しから令めんと欲す。帝は使者を遣わして之を促し、玄感は揚言す、

「水路に盜多く、前後し而して發す可からず。」

玄感の弟の虎賁郎將の玄縱、鷹揚郎將の萬石は、並せて幸に遼東に従い、玄感は潜に人を遣わして之を召し、二人は皆な亡げ還る。萬石は高陽（直隸省保定道高陽県、現・衡水市故城県鄭口鎮）に至り、監事の許華の執る所と為り、涿郡に斬られる。

●【玄感は來護兒の渡海出陣を妨害】時に右驍衛大將軍の來護兒は舟師を以て東萊より將に海に入りて平壤に趣かんとし、玄感は家奴を遣わして偽りて使者と為し東方より來たるとし、詐りて、

「護兒は反す」

と稱す。六月、乙巳（41-39+1=2日）、玄感は黎陽に入り、城を閉ざし、大いに男夫を索め、帆布を取りて牟（兜牟）、甲と為し、官屬を署し、皆な開皇之舊（煬帝の制度の前）に准ず。書を傍郡に移し、護兒を討つを以て名と為し、各々兵を發して倉所（黎陽）に會せ令む。郡縣の官の干用有る者は、玄感は皆な運糧を以て之を追集し、趙懷義を以て衛州刺史（煬帝の齊では太守）と為し、東光（直隸省津海道東光県、現・河北省滄州市東光県）の尉元務本を黎州刺史と為し、河内郡の主簿（州郡に置く）の唐禕を懷州刺史と為す。

●【玄感は反に同意しない游元を殺す】治書侍御史（隋の御史台に二員を置く）の游元は、運を督して黎陽に在り、玄感は謂って曰く、

「獨夫（煬帝）は虐を肆にし、身を絶域に陷いれる、此れ天亡びる之時也。我今親ら義兵を帥いて以て無道を誅せん、卿の意は如何？」

元は色を正して曰く、

「尊公は國の寵靈を荷ない、近古に比無し。公之弟兄は、青紫交々映じ、當に誠を竭くし節を盡くして上は鴻恩に答えると謂う。豈におも意わん墳土未だかわ干かざるに、親ら反噬せぜいを圖らんとは！僕は死有り而して己む、敢えて命を聞かず！」

玄感は怒り而して之を囚え、屢々脅^{おびや}かすに兵を以てし、屈する能わず、乃ち之を殺す。元は、明根（北魏の太和中に儒を以て名あり、誠節傳によれば孫の上に玄の字を脱す）之孫也。

●【玄感は反乱挙兵】玄感は運夫の少壯なる者を選びて五千餘人を得、丹楊（蔣州を改めて丹楊郡と為す）、宣城（宜州を改めて宣城郡と為す）の篙梢（熟練船乗り。篙はフルを操る竿）三千餘人、三牲を刑^{ころ}して衆に誓い、且つ之を諭して曰く、

「主上は無道なり、百姓を以て念と為さず、天下は騷擾し、遼東に死する者は萬を以て計る。今君等と與に兵を起し、以て兆民之弊を救わんとするが、何如や？」

衆は皆な踴躍して萬歳を稱す。乃ち兵を勒して部分す。唐禕は玄感の所より逃げて河内に歸る。

●【李密は楊玄感の軍師となる】是より先玄感は陰に家僮を遣わして長安に至り、李密及び弟の玄挺を召して黎陽に赴かしむ。舉兵するに及び、密は適々至り、玄感は大いに喜び、以て謀主と為し、密に謂って曰く、

「子は常に物を濟^{すく}うを以て己が任と為す、今其の時矣！計^{はかりごと}は將に安くに出でんや？」

密は曰く、

「天子は出征し、遠く遼外に在り、幽州を去ること猶ほ千里を隔てる。南に巨海有り、北に強胡有り、中間の一道は、理として極めて艱危なり。公は兵を擁して其の不意に出で、長驅して薊に入り、臨渝之險（隋の平州盧龍県に属す。直隸省津海道盧龍県、現・秦皇島市盧龍県）に據り、其の咽喉を扼さん。歸路は既に絶え、高麗は之を聞き、必ず其の後を躡まん。旬月を過ぎずして、資糧皆な盡き、(10-284p) 其の衆は降らざれば則ち潰え、戦わず而して擒とす可し、此れ上計也。」

玄感は曰く、

「更に其の次を言え。」

密は曰く、

「關中は四塞にして、天府之國なり、衛文升有りと雖も、意と為すに足らず。今衆を帥いて鼓行し而して西し、城を経て攻める勿かれ、直ちに長安を取るべし。其の豪傑を収め、其の士民を撫し、險に據り而して之を守るべし。天子還ると雖も、其の根本を失えば、徐^{おもむ}ろに圖る可き也。」

玄感は曰く、

「更に其の次を言え。」

密は曰く、

「精銳を簡び、晝夜倍道し、襲いて東都を取り、以て四方に號令すべし。但だ唐禕が之を告げるを恐れる、先ず己に固守せん。若し兵を引いて之を攻めれば、百日にして克たず、天下之兵は四面より而して至り、僕の知る所に非ざる也。」

玄感は曰く、

「然らず、今百官の家口は並せて東都に在り、若し先ず之を取れば、以て其の心を動かすに足らん。且つ城を経て抜かざれば、何を以て威を示すや！公之下計は、乃ち上策也。」

遂に兵を引いて洛陽に向かい、楊玄挺を遣わして驍勇千人を將いて前鋒と為し、先ず河内を取る。唐禕は城に據りて拒み守り、玄挺は獲る所と無し。

【楊玄感の東都攻略】

●【楊玄挺は東都に到達】禕は又た人をして東都の越王（統は東都王）の侗に告げて、樊子蓋等と兵を勒し

て備えを為さ使む、修武（河内郡の県、河南省河北道修武県、現・焦作市修武県）の民は相い帥いて臨清關を守る。玄感（玄は度るを得ず、乃ち汲郡（266年泰始2年西晋汲郡を立て、司州に属し、汲・朝歌・共・林慮・獲嘉・修武の6県を管轄、現・河南省新郷市衛輝市）に於いて南に河を渡り、之に従う者は市の如し。弟の積善をして兵三千を將いて偃師（県、旧廃す。開皇十六年復た置き、河内郡に属す。河南省河洛道偃師県、現・洛陽市偃師区）の南より洛水に縁りて西に入ら使め、玄挺をして白司馬板（邙山の北に在り）より邙山（洛城の北に在り）を逾えて南に入り、玄感は三千餘人を將いて其の後に隨い、相い去ること十里許り、自ら大軍と稱す。其の兵は皆な單刀柳楯を執り、弓矢甲冑無し。東都は河南令の達奚善意を遣わして精兵五千人を將いて積善を拒ましめ、將作監の河南の贊治の裴弘策をして八千人を將いて玄挺を拒ましむ。善意は洛南に渡り、漢王寺に營す。明くる日、積善の兵は至り、戦わずして自ら潰え、鎧仗は皆な積善の取る所と為る。弘策は出でて白司馬板に至り、一戦し、敗走し、鎧仗を棄てる者は太半なり、玄挺も亦た追わず。弘策は退くこと三四里、散兵を収め、復た陳を結び以て之を待つ。玄挺は徐に至り、坐して息むこと良く久しく、忽ち起ちて之を撃ち、弘策は又た敗れ、是くの如く五戦す。丙辰（52-39+1=14日）、玄挺は直ちに太陽門に抵り、弘策は十餘騎（士餘騎×）を將いて馳せて宮城に入り、自餘の一人の返る者無く、皆な玄感に歸す。

● 〔玄感の寛容に衆は喜ぶ〕 玄感（玄は上春門（隋志に河南郡に旧、洛州を置く。大業元年に都を移し、改めて予州と曰う。東面の三門は北なるを上春と曰い、中なるを建陽と曰う、太陽門無し）に屯し、毎に衆に誓いて曰く、

「我が身は上柱國と為り、家は鉅萬金を累ね、富貴に至り、求める所無き也。滅族を顧みざる者は、但だ天下の為に倒懸之急を解かん耳！」

衆は皆な悦ぶ。父老は争いて牛酒を獻じ、子弟は軍門に詣りて自ら效すを請う者は、日に千を以て數える。

● 〔韋福嗣に煬帝を責める檄文作らす〕 内史舍人の韋福嗣（は、洸（陳を平らげる後に声續あり）之兄の子也、軍に従いて出でて玄感を拒む。玄感の獲る所と為る。玄感は厚く之を禮し、其の黨の胡師耽と共に文翰を掌ら使む。玄感（玄は福嗣をして書を為りて樊子蓋に遺り、帝の罪惡を數え令め、（10-285p）云う、

「今昏を廢して明を立てんと欲す、願わくは小禮に拘わり、自ら伊の威（こ）を貽（う）す勿かれ。」

樊子蓋（は新たに外籬より入りて京官と為り（涿郡の留守から東都の留守となる）、東都の舊官は多く之を慢り、軍事を部分するに至りて、未だ甚だ稟を承けず。裴弘策は子蓋と班を同じくし（贊治は留守に次いで班を立つ、故に班を同じくす）、前に出でて賊を討ち利を失い、子蓋は更に出で戦わ使め、肯えて行かず、子蓋は命じて引き出さしめ之を斬りて以て（とな）う。國子祭酒の河東の楊汪（弘農の華陰の人、曾祖の順は河東に徙る）は、小しく不恭有り、子蓋も又た將に之を斬らんとす。汪は頓首して流血し、乃ち免かるを得る。是に於いて將吏は震肅し、敢えて仰視する無し、令すれば行われ、禁ずれば止まる。玄感（玄は鋭を盡くして城を攻め、子蓋は方に隨いて拒み守り、玄感は克つ能わず。然るに達官の子弟の應募して從軍する者は、弘策の死するを聞き、皆な敢えて入城せず。韓擒虎の子の世罽、觀王の雄の子の恭道、虞世基の子の柔、來護兒の子の淵、裴蘊の子の爽、大理卿の鄭善果の子の儼、周羅睺の子の仲等四十餘人は皆な玄感に降り、玄感は悉く親要の重任を以て之を委ねる。善果は、譯（高祖の佐命）之兄子也。

● 〔玄感の軍は五万人を得、虎牢を取る〕 玄感（玄は兵を収めて五萬餘人を得、五千を發して慈潤（統は慈磧、河南省河洛道宜陽県、現・洛陽市宜陽県）道を守らしめ、五千は伊闕（河洛道伊闕県、旧新城、開皇十八年伊闕山を以て名付け、竜門、現・洛陽市洛竜区）道を守らしめ、韓世罽を遣わして三千人を將いて滎陽を圍ましめ、顧覺をして五千人を將いて虎牢（河南省開封道汜水県、旧成皋、現・鄭州市滎陽市汜水鎮、開皇十八年に汜水と為す、大業の始めに虎牢都督府を置く）を取らしむ。虎牢は降り、覺を以て鄭州刺史と為し、虎牢に鎮せしむ。

● 【衛文升の討伐軍は東都に到達】 代王の侑（長安を守る）は刑部尚書の衛文升をして兵四萬を帥いて東都を救わしめ、文升は華陰（京兆郡に属す、楊素は代々に居る、關中道華陰県、現・渭南市華陰市）に至り、楊素の塚を掘り、其の骸骨を焚き、士卒に示すに必死を以てし、遂に鼓行して崤（崤谷、河南省河洛道陝県、現・三門峡市陝州区）、澠（澠池、河洛道澠池県、現・三門峡市澠池県）に出で、直ちに東都の城北に趨く。玄感^{ひと}は逆えて之を拒む。文升は且つ戦い且つ行き、金谷（晋の石崇の金谷なり、河南県の界、河洛道洛陽県の西、現・洛陽市洛竜区）に屯す。

【高句麗遠征中止】

● 【高句麗】 【楊玄感反乱を知り、煬帝は遼東城包囲から撤退】 遼東城は久しく拔かず、帝は布囊百餘萬口を造（遣造×）りて、土を満たし貯め、積みて魚梁の大道（魚梁の様に見える道）を為り、闊さ三十步、高さは城と齊しく、戦士をして登り而して之を攻め使めんと欲す。又た八輪の樓車を作り、高さは城を出で、魚梁道を夾み、俯して城内を射んと欲し、期を指して將に攻めんとし、城内は危蹙す。會々楊玄感の反書は至り、帝は大いに懼れ、納言の蘇威^{ひと}を引いて帳中に入り、謂って曰く、

「此の兒は聰明なり、患を為す無きを得んや？」

威は曰く、

「夫れ是非を識り、成敗を審かにするを、乃ち之を聰明と謂う、玄感^{ひと}は粗疏にして、必ず慮る所無し。但だ此に因りて浸く亂階^{ようや}を成すを恐れる耳。」

帝は又た達官の子弟が皆な玄感の所に在るを聞き、益々之を憂える。兵部侍郎の斛斯政は素より玄感と善く、玄感之反するや、政は之と通謀し、玄縱兄弟が亡げ歸り、政は潜に之を遣る。帝は將に玄縱等の黨與を窮治せんとし、政は内に自ら安ぜず、戊辰（4+60-39+1=26日）、亡げて高麗に奔る。庚午（6+60-39+1=28日）、夜二更（乙夜なり。夜十時頃。甲乙丙丁戊分けて五夜と為す。守卒は番を分けて樓を守り鼓を鳴らし以て相警戒す、之を持つ更という）（10-286p）、帝は密に諸將を召し、軍を引きて還らしめ、軍資、器械、攻具は、積みて丘山の如し、營壘、帳幕は、案堵して動かず、皆な之を棄て而して去る。衆心は恐懼し、復た部分無く、諸道に分散す。高麗は即時に之を覺り、然るに敢えて出でず、但だ城内に於いて鼓噪す。來日午時に至りて、方に漸く外に出で、四遠覘偵し、猶ほ隋軍が之を詐るを疑う。二日を経て、乃ち數千の兵を出して追躡し、隋軍之衆きを畏れ、敢えて逼らず、常に相い去ること八九十里、將に遼水に至らんとし、御營^{ことごと}畢く渡るを知り、乃ち敢えて後軍に逼る。時に後軍は猶ほ數萬人あり、高麗は隨い而して抄撃し、最後の羸弱なる數千人は殺略する所と為る。

● 【煬帝と庚質の現状分析】 初め、帝は高麗を再征し、復た太史令の庚質^{ひと}に問いて曰く、

「今の段（今後）は何如？」

對えて曰く、

「臣は實に愚迷なり、猶ほ前見（前の応えは前卷八年にあり）を執る、陛下は若し親しく萬乗を動かせば、勞費實に多し。」

帝は怒りて曰く、

「我は自ら行くも猶ほ克たず、直だ人を遣わして去れば、安んぞ功有るを得んや！」

還るに及び、質に謂って曰く、

「卿は前に我が行くを欲せざるは、當に此れが為なる耳。玄感^{ひと}は其れ成る有らん乎？」

質は曰く、

「玄感^{ひと}の地勢は隆しと雖も、素より人望に非ず、百姓之勞するに因り、成功を冀幸す。今天下は一家なり、

未だ動かす可きこと易からず。」

● 〔楊玄感討伐軍の編成〕 帝は虎賁郎將の陳稜を遣わして元務本を黎陽に攻めしめ、又た左翊衛大將軍の宇文述、左候衛將軍の屈突通を遣わして傳に乗りて兵を發し以て玄感を討たしむ。來護兒は東萊に至り、玄感が東都を圍むを聞き、諸將を召して軍を旋して之を救うを議す。諸將は咸な以えらく、

「敕無し、宜しく^{ほしいまま}擅に還るべからず」

と、固執して従わず、護兒は聲を厲まして曰く、

「洛陽は圍まれるは、心腹之疾なり。高麗が命に逆うは、猶ほ疥癬のごとき耳。公家之事は、知れば為さざる無し、專擅は吾に在り、諸人に關せず、議を沮む者有れば、軍法をもって從事せん！」

即日回軍す。子の弘、整をして驛を馳せて奏聞せ令む。帝は時に還りて涿郡に至り、已に護兒に敕して東都を救わしめ、弘、整を見、甚だ悦び、護兒に璽書を賜わりて曰く、

「公が師を旋す之時は、是れ朕が公に敕する之日なり、君臣の意合い、遠く符契に同じ。」

● 〔衛文升は玄感と戦いて押される〕 是より先、右武侯大將軍の李子雄は事に坐して除名され、從軍して自ら效さ令め、來護兒に従いて東萊に在り、帝は之を疑い、詔して子雄に鎖して行在所に至（統は送）らしむ。子雄は使者を殺し、逃げて玄感に奔る。衛文升は歩騎二萬を以て瀋水（河南省孟津県の西北任家嶺より出でて東して洛陽・偃師を過ぎて洛水に入る）を渡り、玄感と戦い、玄感は屢々之を破る。玄感は戦う毎に、身は士卒に先だち、向かう所摧陷し、又た善く其の下を撫悦し、皆な為に死を致すを楽しみ、是に由りて戦う毎に多く捷ち、衆は益々盛んなり、十萬人に至る。文升は衆寡敵せず、死傷すること太半なりて且に盡きんとし、乃ち更に進みて邙山之陽に屯し、玄感と決戦し、一日に十餘合す。會々楊玄挺は流矢に中たりて死し、玄感の軍は乃ち稍卻く。

● 〔三吳の亡命者は劉元進に糾合す〕 秋、七月、癸未（19-9+1=1 1 日）、餘杭の民の劉元進は兵を起こして以て玄感に應じる。元進の手は長さ尺餘、臂垂れて膝を過ぎ、（10-287p）自ら相表は常に非ずを以て、陰に異志有り。會々帝は再び三吳（統は三吳の兵）を發して高麗を征し、三吳の兵は皆な相い謂って曰く、

「往歲（八年の事）天下全盛なり、吾が輩の父兄は高麗を征する者は猶ほ太半は返らず。今已に罷弊し、復た此の行を為す、吾が屬は遺類無からん矣！」

是に由りて多く亡命す。郡縣は之を捕えること急なり、元進の舉兵を聞き、亡命者は雲集し、旬月の間に、衆は數萬に至る。

● 〔李密は韋福嗣の危うさを説く〕 始め、楊玄感は東都に至り、自ら謂えらく、天下は響應し、功は朝夕に在りと（統は欠如）。韋福嗣を得、委ねるに心膂を以てし、復た専ら李密に任ぜず。福嗣は畫策する毎に、皆な兩端を持つ。密は其の意を揣り^{はか}知り、玄感に謂って曰く、

「福嗣は元は同盟に非ず、實に觀望を懷く。明公は初めて大事を起こし而るに奸人側に在り、其の是非を聽けば、必ず誤る所と為らん、請う之を斬るべし！」

玄感は曰く、

「何ぞ此に至らん！」

密は退き、所親に謂って曰く、

「楚公（楊玄感は爵楚国公を継ぐ）は好く反し而るに勝ちを欲せず、吾が屬は今虜と為らん矣！」

● 〔李密は楊玄感の尊号を称するを止める〕 李子雄は玄感に速かに尊號を稱するを勧め、玄感は以て密に問い、密は曰く、

「昔陳勝（七卷秦の二世元年にある乱）は自ら王と稱せんと欲し、張耳は諫め而して外される。魏武（曹操）は將

に九錫を求め、**荀彧**は止め而して誅せらる（66 卷漢の獻帝建安 17 年にあり）。今者**密**は正言せんと欲すれば、還た恐れる二子を追蹤せんと。阿諛して意に順うは、又た**密**之本圖に非ず。何となれば者？兵起こして以來、復た頻りに捷つと雖も、郡縣に至りては、未だ従う者有らず。東都の守禦は尚ほ強く、天下の救兵は益々至り、公は當に挺身して力戦し、早く關中を定め、乃ち亟に自ら尊くせんと欲するは、何ぞ人に廣からざるを示す也！」

玄感は笑い而して止む。

● 〔屈突通と楊玄感の激突〕 **屈突通**は兵を引いて河陽に屯し、**宇文述**は之に繼ぎ、**玄感**は計を**李子雄**に問い、**子雄**は曰く、

「**通**は兵事に曉習し、若し一たび河を渡るを得れば、則ち勝負は決し難し、兵を分けて之を拒むに如かず。**通**が濟る能わざれば、則ち**樊**（樊子蓋）、**衛**（衛文升）は援を失う。」

玄感は之を然りとし、將に**通**を拒まんとす。**樊子蓋**は其の謀を知り、數々其の營を撃ち、**玄感**は往くを得ず。**通**は河を濟り、破陵（當に河陽の南岸、洛城の東北に在るべし）に軍す。**玄感**は分けて二軍と為し、西は**文升**に抗し、東は**通**を拒む。**子蓋**は復た兵を出して大いに戦い、**玄感**の軍は屢々敗れ、其の黨と之を謀り、**李子雄**は曰く、

「東都の援軍は益々至り、我が軍は數々敗れ、久しく留まる可からず、直ちに關中に入り、永豐倉（華陰県にあり）を開き以て貧乏を振うに如かず、三輔（漢の三輔の地）は指麾し而して定む可し、府庫に據有し、東面し而して天下を争えば、亦た霸王之業也。」

李密は曰く、

「弘化（帝は慶州を改めて弘化郡と為す、現・甘肅省慶陽市および寧夏回族自治区南部）の留守の**元弘嗣**は強兵を握りて隴右に在り、其の反し、遣使して公を迎えんと聲言す可し、此れに因りて關に入り、以て衆を給く可し。」

● 〔楊玄感は關中侵入失敗して滅亡〕 會々華陰の諸楊（楊玄感の一党）は嚮導を為すを請い、壬辰（28-9+1=20日）、**玄感**は東都の圍みを解き、兵を引いて西して潼關（現・陝西省渭南市潼關県秦東鎮）に趣き、宣言す、「我は已に東都を破る、關西を取る矣！」

宇文述等の諸軍は之を躡む。（10-288p）弘農宮（河南郡陝県に北魏は陝州恆農郡を置く。大業の初め州を廢し弘農宮を置く。北魏は諱を避けて恆農という）に至り、父老は遮りて**玄感**を説いて曰く、

「宮城は空虚なり、又た多く粟を積む、之を攻めれば下し易し。」

玄感は以て然りと為す。弘農太守の蔡王の**智積**（高祖の弟整の子）は官屬に謂って曰く、

「**玄感**は大軍將に至らんと聞き、西に關中を圖らんと欲す、若し其の計成れば、則ち克ち難からん也。當に計を以て之を縻^{つな}ぎ、進むを得ざら使めば、一句を出でずして、以て擒と成す可し。」

玄感の軍が城下に至るに及び、**智積**は陣（城の上の女牆）に登りて之を^{ののし}る。**玄感**は怒り、留まりて之を攻める。**李密**は諫めて曰く、

「公は今衆を詐りて西に入らんとす、軍事は速きを貴び、況んや乃ち追兵將に至らんとするに、^{いずく}安んぞ稽留す可けんや！若し前^{すす}みて關に據るを得ざれば、退きて守る所無し、大衆一たび散ずれば、何を以て自ら全くせんや！」

玄感は従わず、遂に之を攻め、其の城門を焼き、**智積**は内に於いて火を益し、**玄感**の兵は入るを得ず。三日して抜かず、乃ち引き而して西す。閿郷に至り、**宇文述**、**衛文昇**、**來護兒**、**屈突通**等の軍は追いて皇天原（水經注に玉澗水は南して王溪に出で、北流して皇天原の西を経る）に及ぶ。**玄感**は槃豆（西魏の將の于謹が攻め抜きし所の槃

豆) に上り、陳を布して五十里に^{わた}互り、且つ戦い且つ行き、**玄感**は一日に三敗す。八月、壬寅(38-38+1=1日)、**玄感**は董杜原に陳し、諸軍は之を撃ち、**玄感**は大敗し、獨り十餘騎と上洛(帝は商州を改めて上洛郡と為す)に奔る。追騎は至り、**玄感**は之を叱し、皆な反り走る。葭蘆戍に至り、獨り弟の**積善**と徒歩にして走り、自ら免かれざるを^{はか}度り、**積善**に謂って曰く、

「我は人の戮辱を受ける能わず、汝は我を殺す可し！」

積善は刀を抽きて之を斫殺し、因りて自ら刺し、死せず、追兵の執る所と為り、**玄感**の首と俱に行在所に送られる。**玄感**の屍を東都市に磔すること三日、復た嚙し而して之を焚く。**玄感**の弟の**玄獎**は義陽(義陽郡は齊梁の司州、北魏は改めて郢州と曰う。北周改めて申州と曰う。大業の初め義州と改めて尋ぎて改めて義陽郡と為す)太守為り、將に**玄感**に赴かんとし、郡丞の**周旋玉**の殺す所と為る。**仁行**は朝請大夫為り、伏して長安に誅せらる。(楊素の一族滅亡)

● 〔韓相國の反乱崩壊〕 **玄感**之東都を圍む也、梁(帝は宋州を改めて梁郡と為す)郡の民の**韓相國**は舉兵して之に應じ、**玄感**は以て河南道元帥と為し、旬月の間に衆十餘萬あり、郡縣を攻剽す。襄城(東魏は北荊州を置く。北周は改めて和州という。開皇の初め改めて伊州と為す。大業の初め改めて汝州と為し尋ぎて改めて郡と為す)に至り、**玄感**の敗れるを聞き、衆は稍散し、吏の獲る所と為り、首を東都に傳える。

● 〔李淵は煬帝に疎まれ姿をくらます〕 帝は元弘嗣が、**斛斯政**之親なるを以て(也×)、弘化郡に留守せしめ、衛尉少卿の**李淵**(唐の李淵初登場)を遣わして馳せ往きて之を執らしめ、因りて代わりて留守と為し、關右十三郡(天水・隴西・金城・など)の兵は皆な徵發を受ける。**淵**は衆を御すること寛簡にして、人は多く之に附く。帝は**淵**の相表奇異にして、又た名圖讖に應じるを以て、之を忌む。未だ幾くもなくして、徵して行在所に詣らしむ、**淵**は遇々疾にて未だ謁せず、其の甥の**王氏**は後宮に在り、帝は問いて曰く、

「汝の舅は來たること何ぞ遅きや？」(10-289p)

王氏は疾を以て對え、帝は曰く、

「死を得る可きや否や？」

淵は之を聞き、懼れ、因りて酒を縦にして賂を納れて以て自ら晦ます。

● 〔吳の朱燮・管崇の反乱〕 癸卯(39-38+1=2日)、吳郡(陳は吳州を置き、隋は蘇州を置き、大業の初め吳州、ついで吳郡とす)の**朱燮**、晉陵(隋は毘陵郡に當州を置き、帝は晉陵と改める。江蘇省蘇常道武進県、現・常州市武進区)の**管崇**は衆を聚めて江左を寇掠す。**燮**は本は還俗の道人なり、經史を涉獵し、頗る兵法を知り、形容は眇小なり、昆山縣(元漢の婁県。梁は婁県を分けて信義県を置き、さらに分けて昆山縣を置き吳郡に属す。江蘇省蘇常道崑山県、現・蘇州市崑山市)の博士(隋の博士は志に見えず、蓋し曹佐市令の下にあり)と為り、數十學生と起兵し、民の苦役する者之に赴くこと歸するが如し。**崇**は長大、姿容は美しく、志氣倜儻にして、常熟(吳・晋の南沙の地。本は吳県に属す。晋は吳県を分けて海虞県を置き、梁は常熟県を置く。現・江蘇省蘇州市常熟県)に隱居し、自ら言う、王者の相有りと、故に群盜相い與に之を奉ず。時に帝は涿郡に在り、虎牙郎將の**趙六兒**に命じて兵萬人を將いて楊子(江蘇省淮揚道江都県南15里、現・揚州市広陵區・江都区)に屯し、分けて五營と為し以て南賊(劉元進、崇・燮等)に備えしむ。**崇**は其の將の**陸贄**を遣わして江を渡り、夜、六兒を襲い、其の兩營を破り、其の器械軍資を収め而して去り、衆は益々盛んなりて十萬に至る。

● 〔戦後処理〕 辛酉(57-38+1=20日)、司農卿の雲陽(陝西省關中道淳化県の西南、現・咸陽市淳化県)の**趙元淑**は**楊玄感**の黨に坐して伏して誅せらる。帝は大理卿の**鄭善果**、御史大夫の**裴蘊**、刑部侍郎(帝は六部の侍郎を置き、以て尚書の職に忝す)の**骨儀**をして、留守の**樊子蓋**と**玄感**の黨與を推(尋問)せ使む。**儀**は、本は天竺の胡

人也。帝は**蘊**に謂って曰く、

「**玄感**は一呼すれば而して従者は十萬、益々天下の人多きを欲せざるを知る、多ければ即ち相い聚りて盗を為す耳。盡く誅を加えざれば、以て後を懲らす無し。」

子蓋は性は既に残酷なり、**蘊**も復た此の旨を受け、是に由りて法峻なるをもって之を治し、殺す所は三萬餘人、皆な其の家を籍沒し、枉死する者太半なり、流徙する者は六千餘人。**玄感**之東都を圍む也、倉を開きて百姓に賑給す。凡そ米を受ける者は、皆な之を都城之南に坑す。**玄感**の善き所の文士の會稽（梁は東揚州を置き、隋は呉州といい、大業の初め越州と改める。尋いで會稽郡となす）の**虞綽**、琅邪（郡、旧北徐州を置く。北周は改めて沂州と曰う。帝はまた改めて琅邪郡とする）王の**冑**は俱に坐して邊に徙され、**綽**、**冑**は亡命し、捕え得て、之を誅す。

● **〔煬帝は文章自慢〕** 帝は善く文を屬し、人が其の右に出るを欲せず。**薛道衡**は死し（前卷五年）、帝は曰く、

「更に能く『空梁は燕泥を落とす』を作らんや否や！」

王冑の死するや、帝は其の佳句を誦して曰く、

「『庭草人無く意に隨いて緑なり、』復た能く此の語を作らん邪！」

帝は自ら才學を負い、毎に天下之士に驕る、嘗て侍臣に謂って曰く、

「天下は皆な**朕**を謂って、緒餘を承藉し而して四海を有つとす、設し**朕**をして士大夫の高選に與^{あずか}ら令めば、亦た當に天子と為るべし矣。」

● **〔人の諫めるを喜ばず〕** 帝は從容として秘書郎の**虞世南**に謂って曰く、

「我が性は人の諫めるを喜ばず、若し位望通顯に而して諫めて以て名を求める者は、彌々耐えざる所なり。卑賤之士に至りては、少しく寛假すると雖も、然も卒に之を地上に置かず。汝は其れ之を知るべし！」

（10-290p）世南は、世基之弟也。

● **〔曷薩那可汗を存問〕** 帝は**裴矩**をして隴右を安集せ使め、因りて會寧（八年に帝は曷薩那可汗を會寧に置く）に之き、曷薩那可汗の部落を存問せしめ、**闕達度設**を遣わして吐谷渾を寇掠せしめ以て自ら富まし、還り而して狀を奏し、帝は大いに之を賞す。

● 九月（元嘉歴では八月閏月）、己卯（15-8+1=8日）、東海（海州を改める）の民の**彭孝才**は起ちて盗を為し、衆數萬有り。

● 甲午（30-8+1=23日）、車駕は上谷（開皇元年に易県を以て易州を置く、帝は上谷県に改める）に至り、供費の給せざるを以て、太守の**虞荷**等の官を免ず。閏月（元嘉歴では九月）、己巳（5+60-37+1=29日）、博陵に幸す。

● 冬、十月、丁丑（13-7+1=7日）、賊帥の**呂明星**は東郡（古の白馬の地、開皇九年に杞州を置く、十六年に滑州、大業二年に交州、さらに東郡）を圍み、虎賁郎將の**費青奴**は撃ちて之を破る。

● **〔劉元進自立〕** **劉元進**は其の衆を帥いて將に江を渡らんとし、會々**楊玄感**は敗れ、**朱燮**、**管崇**は元進を迎え、推して以て主と為し、吳郡に據り、天子と稱し、**燮**、**崇**は俱に尚書僕射と為し、百官を署置し、毘陵、東陽（婺州を改めて東陽郡と為す）、會稽、建安（大業の初め、泉州を改めて閩州と為す、尋いで建安郡と為す）の豪傑は多く長吏を執り以て之に應じる。帝は左屯衛大將軍の代人の**吐萬緒**（吐萬は鮮卑の複姓）、光祿大夫の下邳（陝西省關中道渭南県の東北五十里、現・渭南市臨渭区）の**魚俱羅**を遣わして兵を將いて之を討たしむ。

● 十一月、己酉（45-37+1=9日）、右候衛將軍の**馮孝慈**は**張金稱**を清河（帝は貝州を改める）に討ち、**孝慈**は敗れて死す。

● **〔韋福嗣の誅殺〕** **楊玄感**之西する也、**韋福嗣**は亡げて東都に詣りて歸首（來たりて自首す）し、是の時其の比の如き者皆な問わず。**樊子蓋**は**玄感**の文簿を収め、其の書草（**韋福嗣**が草する**樊子蓋**への書）を得、封じ以て

帝に呈す。帝は命じて執りて行在に送らしむ。李密は亡命し、人の獲る所と為り、亦た東都に送らる。樊子蓋は鎖して福嗣、密及び楊積善、王仲伯等十餘人を送りて高陽に詣り、密は王仲伯等と竊に亡げ去るを謀り、悉く其の繼す所の金を出ださ使め以て使者に示して曰く、

「吾等の死する日、此の金並びに留めて公に付せん、幸いに用いて相い瘞^{うず}めよ、其の餘は即ち皆な徳に報いん。」

使者は其の金を利として、許諾し、防禁は漸く弛む。密は通じて酒食を市^かわんと請い、宴飲する毎に、喧嘩して夕べを竟^おわり、使者は以て意と為さず。行きて魏郡（帝は相州を改めて魏郡とす）の石梁驛に至り、防守者に飲ませ皆な酔い、牆を穿ち而して逸す。密は韋福嗣を呼び同じく去らんとし、福嗣は曰く、

「我は無罪なり、天子は一たび我を面責するに過ぎざる耳。」

高陽に至り、帝は書草を以て福嗣に示し、收めて大理に付す。宇文述は奏す、

「凶逆之徒は、臣下の當に同じく疾む所なり、若し重法を為さざれば、以て將來を肅ましむる無からん。」

帝は曰く、

「公の為す所を聽さん。」

十二月、甲申（20-6+1=15日）、述は野外に就き、諸々の應に刑すべき者を格上に縛り、車輪を以て其の頸を括り、文武九品以上をして皆な兵を持して斫射せ使め、亂髮する矢は蝟（針鼠）毛の如し、支體は糜碎し、猶ほ車輪の中に在り。積善、福嗣は仍ほ車裂きを加え（10-291p）、皆な焚き而して之を揚ぐ。積善は自ら言う、

「手ずから玄感を殺す、冀くは死を免かるを得ん。」

帝は曰く、

「然らば則ち梟（母を食う不孝の鳥）の類なる耳！」

因りて其の姓を更めて梟氏と曰う。

● 宋子賢の反乱、誅殺 唐縣（直隸省保定道唐県、現・河北省保定市唐県）の人の宋子賢は、幻術を善くし、能く佛形に變じ、自ら彌勒の出世と稱し、遠近は信惑し、遂に無遮大會に因りて舉兵して乘輿（天子の乗り物）を襲わんと謀る。事は洩れ、伏して誅せられ、並せて黨與千餘家を誅す。

● 向海明の反乱 扶風（岐州を改める）の桑門の向海明も亦た自ら彌勒の出世と稱し、人の歸心する者有れば、輒ち吉夢を獲、是に由りて三輔の人は翕然として之を奉じ、因りて舉兵して反し、衆は數萬に至る。丁亥（23-6+1=18日）、海明は皇帝を自稱し、改元して白鳥とす。太僕卿の楊義臣に詔して之を撃破せしむ。

● 帝は衛文升、樊子蓋を召し行在に詣らしむ。之を慰勞し、賞賜（楊玄感を防ぐの功勞）は極めて厚く、遣りて所任（留台に還らしむ）に還らしむ。

● 吐萬緒は劉元進を攻める 劉元進は丹陽（丹楊×、唐の潤州の管下の丹陽県にして本は曲阿なり）を攻め、吐萬緒は江を濟りて之を撃破し、元進は圍みを解きて去り、緒は進みて曲阿に屯す。元進は柵を結びて緒を拒み、相い持つこと百餘日。緒は之を撃ち、賊衆は大いに潰え、死者は萬を以て數える。元進は挺身して夜遁げ、其の壘を保つ。朱燮、管崇等は毘陵に屯し、營を連らねること百餘里、緒は勝ちに乗りて進撃し、復た之を破る。賊は退きて黄山（呉県にあり）を保つ、緒は之を圍み、元進、燮は僅に身を以て免れ、陳に於いて崇及び其の將卒五千（個×）餘人を斬り、其の子女三萬餘口を収め、進みて會稽の圍みを解く。魚俱羅は緒と偕な行き、戦いて捷たざる無し、然るに百姓の亂に従う者は市に歸すが如く、賊は敗れ而して復

た聚まり、其の勢いは益々盛んなり。

● 〔吐萬緒は憂憤して道に卒す〕 元進は退きて建安に據り、帝は緒をして進み討たしめ、緒は士卒の疲弊するを以て、甲を息めて來春を待つを請い、帝は悦ばず。俱羅も亦た以えらく、賊は歲月の平らぐ可きに非ず、諸子は洛京（洛陽、東都）に在り、潜に家僕を遣わして之を迎えしむ。帝は怒る。有司は旨を希い、奏す、

「緒は怯懦にして、俱羅は敗衄す」

と、俱羅は斬に坐し、緒を徴して行在に詣らしめ、緒は憂憤して、道に卒す。

● 〔王世充は元進を討伐成功〕 帝は更に江都の丞の王世充を遣わして淮南の兵數萬人を發して元進を討たしむ。世充は江を渡り、頻る戦い皆な捷ち、元進、變は吳に敗死し、其の餘衆は或は降り或は散る。世充は先に降りし者を通玄寺の瑞像の前に召し香を焚きて誓いを為し、降者は殺さずを約す。散ずる者は始め海に入りて盗を為さんと欲し、之を聞き、旬月之間、歸首は略ぼ盡き、世充は悉く之を黃亭澗に坑し、死者は三萬餘人。是に由りて餘黨は復た相い聚まりて盗を為し、官軍は討つ能わず、以て隋の亡ぶに至る。帝は世充の將帥の才有るを以て、益々寵任を加える。

● 〔群盜はびこり官は機能せず〕 是の歳、詔して盗を為す者は其の家を籍沒す。時に群盜の所在皆な滿ち、群縣の官は之に因りて（10-292p）各々威福を専らにし、生殺は情に任せる矣。

● 〔杜伏威は苗海潮の勢力と糾合〕 章丘（漢の陽丘県、宋魏の高唐、齊郡に属す、開皇十六年に章丘とす。一、現・山東省済南市章丘区）の杜伏威は臨濟（齊郡に属す）の輔公祐と刎頸の交わりを為し、俱に亡命して群盜と為る。伏威は年十六、毎に出でて則ち前に居り、入りては則ち後ろに^{しんがり}殿す、是に由りて其の徒は推して以て帥と為す。下邳（北魏は南徐州を置く、梁は東徐州、東魏は東楚衆、陳は安衆、北周は泗州、帝は改めて下邳郡、現・江蘇省徐州市邳州市）の苗海潮も亦た衆を聚めて盗を為し、伏威は公祐をして之に謂って曰わ使む、

「今我は君と同じく隋の政に苦しみ、各々大義を擧げ、力は分かれて勢いは弱く、常に擒とせられんことを恐れる。若し合して一と為れば、則ち以て隋に敵するに足りん矣。君は能く主と為れば、吾は當に敬いて従うべし、自ら堪えざるを^{はか}揆れば、宜しく來たりて命を聴くべし。不^{しか}らざれば則ち一戦して以て雌雄を決せん。」

海潮は懼れ、即ち其の衆を帥いて之に降る。伏威は淮南を轉掠し、自ら將軍と稱し、江都の留守は校尉（帝は鷹揚府郎將・副郎將を置き、府毎に越騎校尉二人を置き、騎士を掌り、歩兵校尉二人を置き、歩兵を掌る）の宋顥を遣わして之を討たしめ、伏威は與に戦い、^{いつわ}陽りて勝たざると為し、顥の衆を引きて葭葦の中に入れ、因りて上風より火を縦ち、顥の衆は皆な焼死す。海陵（漢の県、臨淮郡に属す。梁は海陵郡を置く。江蘇省淮揚道泰県、現・泰州市海陵区）の賊帥の趙破陳は伏威の兵少なきを以て、之を輕んじ、召して與に力を並せんとす。伏威は公祐をして兵を嚴にして外に居ら使め、自ら左右十人と牛酒を繼して入りて座に於いて謁し破陳を殺し、其の衆を並す。

煬皇帝中大業十年（甲戌、614年）

【高句麗征伐の腰砕け】

● 〔反対無く高句麗再征〕 春、二月、辛未（7-5+1=3）、百僚に詔して高麗を伐つを議し、數日、敢えて言う者無し。戊子（24-5+1=20日）、詔して復た天下の兵を徴し、百道俱に進む。

- 丁酉(33-5+1=29日)、扶風の賊帥の唐弼は李弘芝を立てて天子と為し、衆十萬有り、自ら唐王と稱す。
- 〔隋軍逃亡者相次ぐ〕三月、壬子(48-35+1=14日)、帝は涿郡に行幸し、士卒は道に在り、亡げる者は相い繼ぐ。癸亥(59-35+1=25日)、臨渝宮(直隸省津海道盧龍県にあり、現・秦皇島市盧龍県)に至り、禱(師祭、統は禱、野に在るを禱と曰い、兵の禱を為す)は黄帝(黄帝は阪泉に戦い天下を定める、故に祭りて以て福祥を求める)を祭り、軍に叛く者を斬り以て鼓に鬻^{ちぬ}り、亡げる者も亦た止まず。
- 〔彭城の張大虎討伐〕夏、四月、榆林(帝は勝州を榆林郡に改める)太守の成紀(天水郡に属す県)の董純は彭城(徐州を彭城郡と為す、現・江蘇省徐州市)の賊帥の張大虎と昌慮(漢の県、彭城郡蘭陵県の界)に戦い、大いに之を破り、斬首は萬餘級なり。
- 甲午(30-4+1=27日)、車駕は北平(平州を改める、現・天津市薊州区)に至る。
- 〔延安の劉迦論討伐〕五月、庚申(56-34+1=23日)、延安(北魏は東夏州を置く、西魏は延州、帝は延安郡を置く、現・陝西省延安市宝塔区)の賊帥の劉迦論は自ら皇王と稱し、大世と建元し、衆十萬有り、稽胡と相い表裡して寇を為す。詔して左驍衛大將軍の屈突通を以て關内討捕大使と為し、兵を發して之を撃たしめ、上郡(北魏は東秦州、のち北華州、西魏は敷州、大業二年に鄜城郡と為し、のち上郡)に戦い、迦論並びに將卒萬餘級を斬り、(10-293p)男女數萬口を虜とし而して還る。
- 〔高句麗の降伏、來護兒は討伐主張〕秋、七月、癸丑(49-34+1=16日)、車駕は懷遠鎮に次す。時に天下は已に亂れ、徴兵する所の多くは期を失いて至らず、高麗も亦た困弊す。來護兒は畢奢城(卑沙城、登萊の海道より平壤に赴くにまず通る)に至り、高麗は兵を擧げて逆え戦い、護兒は之を撃破し、將に平壤に趣かんとし、高麗王の元は懼れ、甲子(60-34+1=27日)、遣使して降を乞い、斛斯政(去年高句麗に奔る)を囚送す。帝は大いに悦び、遣使して節を持して護兒を召して還らしむ。護兒は衆を集めて曰く、
「大軍は三たび出で、未だ賊を平らげる能わず、此の還るや復た來たる可からず。勞し而して功無く、吾は竊に之を恥じる。今高麗は實に困しむ、此の衆を以て之を撃てば、日ならずして克つ可し。吾は兵を進めて徑ちに平壤を圍み、高元を取(聚×)り、捷ちを獻じ而して歸らんと欲す、亦た善からず乎！」
答表して行くを請い、肯えて詔を奉じず。長吏の崔君肅は固く争い、護兒は可からず、曰く、
「賊勢は破れる矣、獨り以て相い任じれば、自ら之を辦ずるに足る。吾は關外に在り、事は當に專決すべし、寧ろ高元を得、還り而してた譴を獲るも、此の成功を捨てるは、能くせざる所なり矣！」
君肅は衆に告げて曰く、
「若し元帥に従い詔書に違拒すれば、必ず當に聞奏すべし、皆な應に罪を獲るべし。」
諸將は懼れ、俱に還るを請い、乃ち始めて詔を奉ず。
- 〔高句麗王入朝せず、再挙不能〕八月、己巳(5-2+1=4日)、帝は懷遠鎮より師を班^{かえ}す。邯鄲(直隸省大名道邯鄲県、現・河北省邯鄲市)の賊帥の楊公卿は其の黨八千人を帥いて駕後の第八隊を抄め、飛黃上廐(帝は尚乘局に左右六閑を置く、一に左右飛黃閑、二に左右吉良閑、三に左右龍媒閑、四に左右騶[馬余]閑、五に左右馱駘閑、六に左右天苑閑)の馬四十二匹を得而して去る。冬、十月、丁卯(3-1+1=3日)、上は東都に至る。己丑(25-1+1=25日)、西京に還る。高麗使者及び斛斯政を以て太廟に告げる。仍って高麗王の元の入朝を徴し、元は竟に至らず。將帥に敕して嚴裝せしめ、更に後舉を圖るも、竟に行くを果たさず。
- 〔劉炫の撫夷論の如し〕初め、開皇之末、國家は殷盛し、朝野は皆な高麗を以て意と為し、劉炫は獨り以て不可と為し、《撫夷論》を作り以て之を刺^{さし}り、是に至り、其の言は始めて驗なり。
- 〔斛斯政を殘忍に殺害〕十一月、丙申(32-31+1=2日)、斛斯政を金光門(大興城の西面三門の中門)外に殺し、楊積善(去年殺す)之法の如し、仍ほ其の肉を烹、百官をして之を啖^くわ使め、佞者は或は之を啖らい飽

くに至る、其の餘骨を収め、焚き而して之を揚ぐ。

【続々と反乱の火の手】

●乙巳（41-31+1=1 1 日）、南郊に事有り、上は次（自ら修正）に齋せず。詰朝、法駕（漢は秦の制により大駕 81 乗、法が 36 乗。隋の開皇中大駕 12 乗、法駕半減。帝は其の制を定め、大駕 36 法駕 12）を備え、至れば即ち禮を行う。是の日、大風ふく。上は獨り上帝に獻じ、三公は分かれて五帝に獻ず。禮畢り、御馬は疾驅し而して歸る。

●「離石胡の劉苗王は天子自称」乙卯（51-31+2 1 日 1=），離石（郡、北齊は西汾州を置き北周は汾州、帝は離石郡とす、現・呂梁市離石区）胡の劉苗王は反し、天子を自称し、衆は數萬に至る。將軍の潘長文は之を討つも、克たず。

●「王德仁は盜を為す」汲郡（東魏は義州を置く、北周は衛州、帝は汲郡とす）の賊帥の王德仁は衆數萬を擁し、林慮山（河南省河北道林県にあり、現・安陽市林州市）を保ちて盜を為す。

●「太史令の庚質の獄死」帝は將に東都に如かんとし、太史令の庚質は諫めて曰く、
「比の歲遼（高句麗征伐の事）を伐ち、民は實に勞弊す、陛下は宜しく關内を鎮撫し、百姓をして力を農桑に盡くさ使むべし、三五年の間には、（10-294p）四海は稍豐實し、然る後に巡省すれば、事に於いて宜しと為す。」

帝は悦ばず。質は疾いと辭し従わず、帝は怒り、質を獄に下し、竟に獄中に死す。十二月、壬申（8-0+1=9 日）、帝は東都に如き、天下に赦す。戊子（24-0+1=2 5 日）、東都に入る。

●「彭城の留守の董純の誅殺」東海の賊帥の彭孝才は沂水を轉掠し、彭城の留守の董純は討ちて之を擒とす。純は戦い屢々捷つと雖も、而るに盜賊は日々に滋し、或は純は怯懦なりと譖す。帝は怒り、純を鎖して東都に詣らしめ、之を誅す。

●「江都丞の王世充は賊を破る」孟讓は長白山より諸郡を寇掠し、盱眙（安徽省淮泗道盱眙県、現・淮安市盱眙県）に至り、衆は十餘萬、都梁宮（都梁杏を産すより命名）に據り、淮を阻みて固めと為す。江都丞の王世充は兵を將いて之を拒み、五柵を為りて以て險要を塞ぎ、羸形弱きを示し。讓は笑いて曰く、

「世充は文法の小吏なり、安んぞ能く兵を將いるや！吾は今生きて縛り取らん、鼓行して江都に入らん耳！」

時に民は皆な堡を結びて自ら固め、野に掠する所無く、賊衆は漸く餒え、乃ち少しく兵を留めて、五柵を圍み、人を分けて南方に於いて抄掠せしむ。世充は其の懈るを伺い、兵を縦ちて出でて撃ち、大いに之を破り、讓は數十騎を以て遁げ去り、斬首は萬餘級なり。

●「齊郡丞の張須陁の大活躍」齊郡の賊帥の左孝友は衆十萬にして蹲狗山（形による名前）に屯し、郡丞の張須陁は營を列ねて之に逼り、孝友は窘迫して出で降る。須陁の威は東夏に振い、功を以て齊郡の通守（煬帝は州をやめて郡を置き、太守を置く。その後に諸郡に各々通守の一人を加えて置く、太守に次ぐ）に遷り、河南道十二郡黜陟討捕大使を領す。涿郡の賊帥の盧明月は衆十餘萬ありて祝阿（齊郡の県、統は山東省東臨道禹城県とするが、濟南道齊河県、現・德州市齊河県祝阿鎮）に軍し、須陁は萬人を將いて之を邀える。相い持つこと十餘日、糧は盡き、將に退かんとし、將士に謂って曰く、

「賊は吾が退くを見、必ず衆を悉くして來たり追わん、若し千人を以て襲いて其の營に據れば、大利有る可からん。此れ誠に危事なり、誰か能く往く者をや？」

衆は對える莫し、唯だ羅士信及び歷城（齊郡を帯びる）の秦叔寶は行くを請う。是に於いて須陁は柵を委て而して遁げ、二人をして分けて千兵を將いて葭葦の中に伏せ使め、明月は衆を悉くして之を追う。士信、

叔寶は馳せて其の柵に至り、柵門は閉じ、二人は其の樓に超升し、各々數人を殺し、營中は大いに亂れる。二人は關を斬り以て外兵を納れ、因りて火を縦ちて其の三十餘柵を焚き、煙焰は天に漲る。明月は奔り還り、須陀は軍を回して奮撃し、大いに之を破り、明月は數百騎を以て遁げ去り、俘斬する所は算無し。叔寶の名は瓊、字を以て行う。

煬皇帝中大業十一年（乙亥，615年）

● 〔煬帝の学問好き〕 春，正月，秘書省の官を百二十員（隋の制では監丞各々1人、郎4人、校書郎12人、正字4人、著作郎2人、左郎8人、校書郎・正字各々2人。煬帝は少監1人を増し、校書郎を減じて10人と為し、左郎4人を加置し、又儒林郎10人・文林郎20人を置き、校書郎員40人を増し、楷書郎員20人を加置す、凡そ117人）に増し、並びに學士を以て之を補す。

（10-295p）帝は好みて讀書著述し、揚州總管と為り（開皇十年）しより、王府（正府×）學士を置き百人に至り、常に修撰せ令め、以て帝と為るに至り、前後二十載に近く、修撰すること未だ嘗て暫くも停まらず。經術、文章、兵、農、地理、醫、卜、釋、道より乃ち蒲博（賭博）、鷹狗に至るまで、皆な新書を為り、精洽せざるは無し、共に三十一部、萬七千餘卷を成す。初め、西京の嘉則殿に書三十七萬卷有り、帝は秘書監の柳顧言等に命じて詮次せしめ、其の復重猥雜を除き、正御本三萬七千餘卷を得、東都の修文殿に納れる。又た五十の副本を寫し、簡びて三品と為し、分けて西京、東都の宮、省、官府に置き、其の正御書（続は正書）は皆な裝剪華淨にして、寶軸錦標（標は卷端）なり。觀文殿の前に於いて書室十四間を為り、窗戶（窓戶）床褥廚幔、咸な珍麗を極め、三間毎に方戸を開き、錦幔を垂れ、上に二飛仙有り、戸外地中には機發を施す。帝が書室に幸すれば、宮人有りて香爐を執り、前行して機を踐み、則ち飛仙下り、幔を収め而して上り、戸扉及び廚扉は皆な自ら啟き、帝出ずれば、則ち垂閉して故に復す。

● 〔郡県村に築城〕 帝は戸口逃亡し、盜賊繁多なるを以て、二月，庚午（6+60-59+1=8日），民に詔して悉く城居せしめ、田は近きに隨いて給す。郡縣驛亭村塢に皆な城を築く。

● 上谷の賊帥の王須拔は漫天王を自稱し、國を燕と號す。賊帥の魏刀兒は歷山飛を自稱す。衆は各々十餘萬、北は突闕に連なり、南は燕、趙に寇す。

● 〔李渾一族抹殺、宇文述加担〕 初め、高祖は洪水が都城を没すと夢み、意は之を惡み、故に大興に遷都す。申明公の李穆は薨じ（176 卷陳の長城公至德四年にあり）、孫筠は爵を襲う。叔父の渾は其の吝嗇に忿り、兄の子の善衡をして之を賊殺せ使め、而して其の從父弟の瞿曇を證し、之をして死を償わ使む。渾は其の妻の兄の左衛率の宇文述に謂って曰く、

「若し紹封を得れば、當に歳ごとに國賦之半ばを奉ずべし。」

述は之が為に太子に言い、高祖に奏し、渾を以て穆の嗣と為す。二歳之後に、復た國賦を以て述に與えず、述は大いに之を恨む。帝は即位し、渾は累官して右驍衛大將軍に至り、改めて郕公に封じ、帝は其の門族の強盛なるを以て、之を忌む。會々方士の安伽陀という有り言う、

「李氏は當に天子と為るべし」

と、帝に勸めて盡く海内の凡そ李姓の者を誅せしむ。渾の從子の將作監の敏は、小名は洪兒、帝は其の名の讖に應じるを疑い、常（続は嘗）に面のあたりに之を告げ、其の引決せんことを冀う。敏は大いに懼れ、數々渾及び善衡と人を屏けて私語す。述は之を帝に譖し、仍って虎賁郎將の河東（帝は蒲州を河東郡とす）の

裴會基（続は裴仁基）を遣わして表して、**渾**は反すと告げしむ。**帝**は**渾**等の家を収め、尚書左丞の**元文都**、御史大夫の**裴蘊**を遣わして之を治せしめ、案問すること數日、反狀を得ず、實を以て奏聞す。**帝**は更に**述**を遣わして之を窮治せしめ、**述**は**敏**の妻の**宇文氏**（北周の天元の女、帝の姉の子）を誘教して表を為り、**渾**を誣告せしめ、

「遼を渡るに因り、其の家の子弟の將領と為る者と共に襲いて御營を取り、**敏**を立てて**天子**と為さんと謀る。」

述は持ち入りて、之を奏し、(10-296p) **帝**は泣いて曰く、

「吾が宗社は幾んど傾かんとす、公に頼りて全くするを獲る耳。」

三月、丁酉（33-29+1=5日）、**渾**、**敏**、**善衡**及び宗族三十二人を殺し、三從より以上は皆な邊徼に徙す。後數月にして、**敏**の妻も亦た鳩死す。

● **儀鸞殿造営** 二孔雀有り西苑（洛城の西に在り、元年に築く）より飛びて寶城（洛城の羅郭の内に在り）の朝堂前に集まり、親衛校尉（帝は親侍鷹揚府を置き親勳武三侍を領せしむ。三侍は三衛なり、各々越騎校尉・歩兵校尉を置く）の**高德儒**等十餘人は之を見、奏して以て鸞と為す。時に孔雀は已に飛び去り、驗を得る可き無し、是に於いて百僚は賀を稱す。詔して**德儒**の誠心冥會し、肇めて嘉祥を見るを以て、擢んで朝散大夫に拜し、物百段を賜わり、餘人は皆な束帛を賜う。仍ほ其の地に於いて儀鸞殿を造る。

【突厥始畢可汗は煬帝に反旗】

● **汾陽宮は迫隘** 己酉（45-29+1=17日）、**帝**は太原に行幸す。**夏**、四月、汾陽宮に幸して避暑す。宮城は迫隘にして、百官士卒は山谷の間に布散し、草を結びて營を為り而して之に居る。

● **李淵登場、群盜討伐** 衛尉少卿の**李淵**を以て山西、河東の撫慰大使と為し、製を承けて黜陟し郡縣の文武官を選補せしめ、仍ほ河東の兵を發して群盜を討捕せしむ。**淵**は行きて龍門（漢の艾氏県、北魏は龍門とする。河東郡に属す。山西省河東美智河津県西二里、現・運城市河津市）に至り、賤帥の**母端兒**を撃ち、之を破る。

● **秋**、八月、乙丑（1+60-57+1=5日）、**帝**は北塞を巡る。

● **裴矩は突厥の始畢可汗に調略** 初め、**裴矩**は突厥の**始畢可汗**の部衆の漸く盛んなるを以て、策を獻じて其の勢いを分け、宗女を以て弟（続は其弟）の**叱吉設**に嫁せしめんと欲し、拜して**南面可汗**と為す。**叱吉**は敢えて受けず、**始畢**は聞き而して漸く怨む。突厥之臣の**史蜀胡悉**は謀略多く、**始畢**の寵任する所と為り、**矩**は詐りて與に互市を為し、誘いて馬邑（帝は朔州を改める）の下に至り、之を殺す。遣使して**始畢**に詔して曰く、

「**史蜀胡悉**は可汗に叛して來降す、我は已に相為に之を斬る。」

始畢は其の狀を知り、是に由りて朝せず。

● **突厥は雁門の煬帝を包囲** 戊辰（4+60-57+1=8日）、**始畢**は騎數十萬を帥いて乘輿を襲わんと謀り、**義成公主**は先ず使者を遣わして變を告げる。壬申（8+60-57+1=12日）、車駕は馳せて雁門（郡、北周は肆州を置く。開皇五年に代州と為す。帝は雁門郡に改める、現・忻州市代県）に入り、齊王の**暕**は後軍を以て崞縣（漢の県、北魏は石城県を置く。開皇十年に平寇と曰う。大業の初め崞縣と改め、雁門郡に属す。山西省雁門道渾源県、現・大同市渾源県）を保つ。癸酉（9+60-57+1=13日）、突厥は雁門を圍み、上下は惶怖し、民屋を撤して守禦之具を為り、城中の兵民十五萬口、食は僅かに二旬を支える可く、雁門の四十一城、突厥は其の三十九に克ち、唯だ雁門、崞は下らず。突厥は急に雁門を攻め、矢は御前に及ぶ。上は大いに懼れ、趙王の**杲**を抱き而して泣き、目は盡く腫れる。

● **〔高句麗討伐中止で、突厥専念〕**左衛大將軍の宇文述は帝に、

「精銳數千騎を簡びて圍みを潰し而して出ずるべし」

と勸め、納言の蘇威は曰く、

「城守れば則ち我餘力有り、輕騎は乃ち彼之長ずる所なり、陛下は萬乘之主なり、豈に宜しく輕々しく動くべけんや！」

民部尚書の樊子蓋は曰く、

「陛下は危きに乗じて徼幸（非望を覩うなり）し、一朝狼狽すれば、之を悔いるとも何ぞ及ばん！堅城に據りて以て其の銳を挫くに若ず、坐して四方の兵を徴し入援せ使むべし。陛下親ら士卒を撫循し、諭すに復た遼を征さざるを以てし、厚く勳格を為せば、必ず人人は自ら奮わん、何ぞ濟らざるを憂えんや！」

内史侍郎の蕭瑀は以為く、

「突厥之俗は、可賀敦（突厥の可汗の妻をいう）が軍謀を知るに預る。（10-297p）且つ義成公主は帝の女を以て外夷に嫁し、必ず大國之援を恃まん。若し一介をして之に告げ使めば、借使益無くとも、庸んぞ何の損有らん。又た、將士之意は、陛下は既に突厥之患いを免れれば、還た高麗の事とするを恐れ、若し明詔を發し、諭すに高麗を赦し、専ら突厥を討つを以てせば、則ち衆心は皆な安んじ、人は自ら戦いを為さん矣。」

瑀は、皇后之弟也。虞世基も亦た帝に勸む、

「重く賞格を為し、下詔して遼東之役を停めん。」

帝は之に従う。

● **〔煬帝は恩賞を約束〕**帝は親ら將士を巡り、之に謂って曰く、

「努力して賊を撃て、苟しも能く保全すれば、凡そ行陳に在るは、富貴を憂う勿かれ、必ず有司をして刀筆を弄し汝の勳勞を破ら使めず。」

乃ち下令す、

「城を守りて功有る者は、官直無きは六品に除し、物百段を賜わらん。官有るは次を以て増益せん。」

使者慰勞し、道に相い望み、是に於いて衆は皆な踴躍し、晝夜拒み戦い、死傷は甚だ衆し。

● **〔李世民初登場、軍略頭角を現す〕**甲申（20+60-57+1=24日）、詔して天下に募兵し、守令は競いて來たりて難に赴く。李淵之子の世民（唐の二代皇帝太宗）は、年は十六、募りに應じて屯衛將軍の雲定興に隸し、定興に多く旗鼓を繼^{もたら}して疑兵を為すを説きて、曰く、

「始畢は敢えて舉兵して天子を圍む、必ず我は倉猝にして赴き援ける能わずと謂えるが故也。宜しく晝は則ち旌旗を引き數十里絶えず、夜は則ち鉦鼓相い應ぜしむべし、虜は必ず救兵大いに至ると謂い、風を望みて遁げ去らん。然らざれば、彼は衆、我は寡なり、若し軍を悉くして來たり戦えば、必ず支える能わず。」

定興は之に従う。

● **〔義成公主の機転で突厥撤退〕**帝は間使を遣わして救いを義成公主に求め、公主は遣使して始畢に告げて云う、

「北邊に急有り。」

東都及び諸郡の援兵も亦た忻口（九域志に忻州秀容県に忻口寨有りと。秀容は樓煩郡に属す。隋は忻州を置く。現・呂梁市嵐県）に至る。九月、甲辰（40-26+1=15日）、始畢は圍みを解きて去る。帝は人をして出で偵さ使め、山谷は皆な空なり、胡馬無く、乃ち二千騎を遣わして追躡し、馬邑に至り、突厥の老弱二千餘人を得而して還る。

●**〔車駕は東都に向かう〕**丁未(43-26+1=18日)、車駕は還りて太原(帝は并州を改めて太原郡と為す)に至る。

蘇威は帝に言つて曰く、

「今盜賊は息まず、士馬は疲弊す、願わくは陛下は亟に西京に還るべし、根を深くし本を固め、社稷の計を為さん。」

帝は初め之を然りとす。宇文述は曰く、

「從官の妻子は多く東都に在り、宜しく便道より洛陽に向かい、潼關より而して入るべし。」

帝は之に従う。

●**〔煬帝は賞賜ケチ、高句麗再征議して將士は憤怒〕**冬、十月、壬戌(58-56+1=3日)、帝は東都に至り、街衢を顧眄し、侍臣に謂つて曰く、

「猶ほ大いに人の在る有り。」

意に謂うに向日に楊玄感^{しお}を平らぐる、殺人尚ほ少き故也。蘇威は追論す、

「勳格は太だ重し、宜しく斟酌を加えるべし」

と、樊子蓋は固く請い、以為く、

「宜しく信を失うべからず、

と、帝は曰く、

「公は物情(人望)を収めんと欲する邪！」

子蓋は懼れ、敢えて對えず。帝は性は官賞を吝み、初め楊玄感^{しお}を平らげるや、應に勳を授けるべき者多し、乃ち更に戎秩、建節尉を置きて正六品と為し、次に奮武、宣惠、綏德、懷仁、秉義、奉誠、立信等の尉、遞^{たが}いに一階を降す。將士の雁門を守る者は萬七千人、是に至り、勳を得る者は才^{わずか}に千五百人、皆な玄感を平らげる勳に准じ、一戰して第一勳を得る者は一階を進め、其の先に戎秩無き者は止だ立信尉を得、三戰して第一勳を得る者は秉義尉に至り、其の行陳に在り而して勳無き者は(10-298p)四戰して一階を進め、亦た賜り無し。會々仍ほ高麗を伐たんと議し、是に由りて將士は憤怒せざるは無し。

●**〔蕭瑀と楊子崇の左遷〕**初め、蕭瑀は外戚にして才行有るを以て、嘗て帝に東宮に事え、累遷して內史侍郎に至り、委ねるに機務を以てす。瑀の性は剛鯁にして、數々事を言つて旨に忤い、帝は漸く之を疏んじる。雁門の圍み解けるに及び、帝は群臣に謂つて曰く、

「突厥は狂悖なり、勢いは何そ能く為さん！少時未だ散ぜず、蕭瑀は遽に相い恐動し、情は恕す可からず！」

出して河池(北魏は南岐州を置く。北周は改めて鳳州という。帝は河池に改める)郡守と為し、即日之を遣わす。候衛將軍の楊子崇は帝に従いて汾陽宮に在り、突厥が必ず寇を為すを知り、屢々早く京師に還るを請い、帝は納れず、圍みを解くに及び、帝は怒りて曰く、

「子崇は怯懦なり、衆心を驚動し、爪牙之官に居る可からず。」

出して離石郡守と為す。子崇は、高祖之族弟也。

●楊玄感之亂に、龍舟水殿は皆な焚く所と為り、江都に詔して更に造らしめ、凡そ數千艘、制度は仍ほ舊者よりも大なり。

●壬申(8+60-56+1=13日)、盧明月は衆十萬を帥いて陳(淮陽郡)、汝(襄城郡)を寇す。

●**〔李子通と杜伏威〕**東海の李子通は、勇力有り、先ず長白山の賊帥の左才相に依り、群盜は皆な殘忍なり、而るに子通は獨り寬仁にして、是に由り人は多く之に歸し、未だ半歲にならず、衆萬人有り。才相は

之を忌み、**子通**は引いて去り、淮を渡り、**杜伏威**と合す。**伏威**は軍中の壯士を選びて養いて假子と為し、凡そ三十餘人、濟陰の**王雄誕**、臨濟の**闕稜**は之が冠と為る。既に而して**李子通**は**伏威**を殺さんと謀り、兵を遣わして之を襲う。**伏威**は重創を被りて馬より墜ち、**雄誕**は之を負いて葭葦中に逃げ、散兵を収めて復た振う。將軍の**來整**は**伏威**を撃ち、之を破る。其の將の西門の**君儀**之妻の**王氏**は、勇に而して力多く、**伏威**を負い以て逃げ、**雄誕**は壯士十餘人を帥いて之を衛り、隋兵と力戦し、是に由り免かるるを得る。**來整**は又た**李子通**を撃ち、之を破り、**子通**は其の餘衆を帥いて海陵に奔り、復た兵を収めて二萬人を得、將軍を自稱す。

● [朱粲は亡命して迦樓羅王と自称] 城父（譙郡に属す。安徽省淮泗道亳県の東南 79 里、現・亳州市譙城区）の**朱粲**は始め縣の佐史（隋の郡県にあり）為り、軍に従い、遂に亡命して衆を聚めて盜を為し、之を「可達寒賊」と謂う、自ら迦樓羅王と稱し、衆は十餘萬に至り、兵を引いて荊（南郡）、沔（沔陽郡）及び山南の郡縣を轉掠し、過ぎる所噍類遺る無し。

● [李淵は関中に名声] 十二月、庚辰（庚寅×、 $16+60-55+1=22$ 日）、民部尚書の**樊子蓋**に詔して關中の兵數萬を發して絳賊（絳郡の賊）の**敬盤陀**等を撃つ。**子蓋**は臧否を分けず、汾水之北より、村塢は盡く之を焚き、賊の降る者有れば皆な之を坑にす。百姓は怨憤し、益々相い聚りて盜を為す。詔して**李淵**を以て之に代わらしむ。降る者有れば、**淵**は引いて左右に置き、是に由りて賊衆は多く降り、前後數萬人、餘黨は散じて它郡に入る。

令和 6 年 2 月 27 日 翻訳開始 11978 文字

令和 6 年 3 月 9 日 翻訳終了 25719 文字